不思議な異変

「やっぱり。どう考えても変よね。」

夜が明け光が差す宿のカウンターに座る仏蘭の目線の先には、ガーリーな服を着てくるくる回る雫の姿があった。

昨夜目を覚ました雫は、不思議な声を聞いたことしか覚えておらず、それ以外では「前髪を切ろうと思っている」「少し服を着替えたい」「わたしはどんな系統が似合うと思いますか」などと、名取や仏蘭を終始唖然とさせた後、「疲れたのでもう一度寝てもいいですか？」とそのまま眠ってしまった。再び目を覚ますとその足で、怖い体験をしたにも関わらず望鏡の間へ向かい、こうして着替えては二人の前で似合うかどうかの確認をとっている。

「どうでしょうか？」

「あー・・・うん。だからさ雫。あんたは素材がいいから、割と何着ても似合ってるって

ば。」

仏蘭は呆れつつ、何度目かの感想を述べた。

「そうですか！？」

満更でもない様子で、雫は嬉しそうに一人いろいろなポーズをとっては、目で（どうです？）と訴えかけてくる。

「心境の変化ってレベルじゃないわよ。ちょっとどうなってんのよこれ。」

仏蘭はカウンターに肘をついて同じように雫を見守っている名取に助けを求める。

「雫に何が起こっているのかは、わたしにもわからない。不思議な声しか手掛かりがないんじゃね。」

微笑んで雫に手振りで「かわいいよ」と伝えている名取は、仏蘭にだけ聞こえる音量で笑顔とは対照的な声でそう答える。

「あんた従業員でしょ！？見てみなさいよまるで別人だわ。ただ事じゃないって。」

仏蘭もそれに合わせて、雫に手を振りながらいぶかしんだ声で感情を伝えた。

「わたしが知ってるのは、わたしがここに来てからのことだけ。あの鏡にそんな力はないってことと、不思議な声って情報だけで思い浮かぶものがないってことは言えるけどね。」

名取は大きく息を吐きながらカウンターから離れ、おもむろに結っていたお粗末なゴムを外し、ポニーテールを崩し髪の毛を手櫛で整える。なんてことないその一連の動作は、この場にいる誰の記憶に残るでもないと思われたが、明らかに雫がそれに反応して顔が曇ったことを二人は察した。

「なに！？雫？どうかした？」

仏蘭が少し慌てて雫に尋ねる。しかし雫はなにも答えず、自分のさらさらとした髪を名取と同じように手櫛で何度か梳（す）き、下唇を噛んでそのまま望鏡の間へと足早に去っていった。

名取と仏蘭は何が起こったのかまたも理解できず、呆然と雫の背中を見送り、出てくるまで入り口の暗幕から目を離せないでいると、

すぐに雫が嬉しそうな表情で部屋から出てきた。しかしその髪型は、先ほどまで名取がしていた高い位置でのポニーテールへと変わっていた。

「・・・なに？ポニーテールにしに・・・いったの？」

仏蘭が困惑した声で独り言を呟く。

「どうでしょうか？」

機械的に現状を尋ねてくる雫に仏蘭は恐怖を覚え、名取に視線だけを送る。

「雫？なんで髪型変えたの？さっきのも似合ってたのに。」

先ほどまで仏蘭と交わしていた声色を変えず、名取が雫に尋ねる。

「気分が変わったからですよ。特に理由はないです。」

初めて見た雫の瞳は、とても純真で無垢な少女の目そのものようだった。今まで覆いかぶさっていた前髪を切ってきた一番最初はそう思ったが、何かに取り憑かれたようにも見

えるその目が、お手本のような三日月型に細くなるその目が、内に秘めた狂気を滲ませている。

「そう・・・とっても似合ってると思うよ」

名取は笑顔でそう返し、喜ぶ雫は触覚を摘みそれを眺め始めた。

「もー、女将はどこ行ったのよっ！」

仏蘭は立ち上がり叫ぶ。

「なんかメモの一つくらい残してないわけ？」

大きな動きで艶のある巻き髪がうねる。仏蘭は鬱陶しいと言わんばかりにそれらを豪快に払いながらカウンターの内側に視線を向けていると、「仏蘭っ！見て！」と名取の緊張感のある声が上から降ってきた。

仏蘭が急いで視線を雫へと向け直すと、雫の顔がまた陰り、さらにこちらを睨んでいるように見えた。

「なに？」

猛獣に睨まれている鹿のように視線は外さず に名取に現状の説明を求めるが、「何がなん

だか。」と謎を謎のままにする回答しか得られない。

「わたし何かした？」

自分の身体や白い服、胴回りに結ばれた黄色いリボンや髪に結えてある白い薔薇の飾りと手探りで理由を探すが皆目見当がつかず、

「あなたは立って、カウンターの奥を見ただけ。」と言う名取の言葉を受けてその動作を中断した。

そうこうしていると雫はまた望鏡の間へと向かい暗幕の中に消えていった。

「ちょっと・・・」

「うん。今の目は危ないかも。」

名取の吊り上がった凛々しい目が鋭くなる。

空気が変わったことを察知した仏蘭はその場に座り込み、今自分がとった行動を振り返る。

顎に手を添え記憶を辿ろうとカウンターの木目へと視線を落とし始めていると、その視界の端で何かが動き、仏蘭はゆっくりと目を覚ました紅蘭へと顔を向けた。

「おはよう。」

あくびを熊ぱちで隠しながらカウンターに近づいてくる紅蘭に名取が声をかける。

「うん。おはよう。」

雫の叫び声を聞いて食堂から駆けつけた名取には昨日のうちに現状を伝えてあり、「なんだ。もっと早くそういう顔見たかったよ。」と責めることも諌めることもしなかった名取に紅蘭は心を許し始めていた。

「あれ？雫ちゃんは？・・・どうしたの？」

二人のただならぬ雰囲気に気づいた紅蘭は、鴨と熊をカウンターに置き目だけで会話を求める。

「ちょっと、いろいろあってね。」

「雫は昨日のままよ。おかしくなってるの。」

「こらっ！」

それっきり二人の会話は続かず、しんと静まりかえる音だけになった。しかしすぐに名取の視線が自分の背後に注がれていることに気づきつられて振り返ると、長髪で巻き髪の雫

が嬉しそうにこちらに向かってくるところだった。

「どうでしょうか？」

評価を求めるその口調に違和感を覚え紅蘭は一瞬後ろの二人を見る。

「また・・・髪だけ。」

仏蘭のできる種類の少ない表情の中でも、困惑だと見て取れる何かを感じたが紅蘭は湧き上がる言葉を抑えることができなかった。振り返り「雫ちゃん凄くかわいいよー！やっぱり顔出したほうがいいし、その髪型もまるで〝仏蘭〟みたいだよ。」と賛辞を述べた。だが雫から返ってきたのは、今まで見たこともないような怒りを湛えた怨みがましい表情だけだった。

「えっ！？どうしたの？」

潜在的な恐怖を逆撫でされるような異質な感覚が背中から全身に広がる。紅蘭は本能で一歩後ずさると、それを追いかけるように雫の視線が足下から頭の先まで動いた。

「・・・・・うるさい。」

「えっ！？」

「うるさいっ！」

何もかもが思っていた反応と違うことに紅蘭は混乱し、自然となにかが目元にせり上がりすぐに溢れて頬を伝う。

「紅蘭っ！」

名前を呼ばれて反射的に声のした方へ首を振る。するとカウンターの奥で微笑む名取と目が合い、名取は自分の左の髪を耳にかけ、耳たぶを指差してから握った。紅蘭は訳もわからず、子供のようにその名取の行動を真似した。右と左の判別もままならないまま、名取に見えるようにと右の髪を同じように耳にかけ、自分の耳たぶを触る。

すると雫の押し殺したような唸りが空気を揺らし、視線を向けるとすでに望鏡の間へと駆け出していた。

「紅蘭。」

最早されるがままの状態で首を捻ると、また

しても微笑む名取と目が合った。

「あんた一回部屋に戻ってな。」

「えっ！？」

混乱した頭はすべてを悪い方にしか捉えず、今この瞬間に至るまでのすべての記憶が黒く染められ始める。

「・・・・・・・はい・・・・。」

自分の傷を自然と話せた相手に拒絶され、優しいと心を許しかけた人に邪魔だと言われた。

ほぐれかけていた表情筋にまた鍵が掛かり、紅蘭は両拳を爪が掌に食い込むほど握り締めようと力を込めた。

「わたしも一緒に行くわ！」

遮断しかけていた思考に仏蘭の快活な声が割って入ってきた。紅蘭は絶望を満遍なく塗りたくった顔を上げると、カウンターの上で自信満々に腕を組む仏蘭が真っ直ぐに目を合わせてくれていた。

「この連中はどいつもこいつも暗いのよ。どうせあんたも、ああ嫌われたっ！とか、心

開ける人だと思ったのにー。とか一人で勝手に捏造してるんでしょ？このままだとあんたまたあの辛気臭い顔に戻りそうだから、わたしも一緒にいてあげるわ！」

仏蘭の姿は不思議と光っているように見えた。

「言い方が悪かったかな。ごめんね紅蘭。」

名取が変わらない微笑みを向けてくれる。

「でもこのままだと危険だから。仏蘭も一緒にいてくれるなら、落ち着いてから話をしてもらいな。」

「どうなのよ名取。」

「うん。さっきのはアウトだね。すごく悪い感情だった。」

「どうするつもりよ？」

「とりあえず、次に出てきた雫の髪型を見て決めるよ。早く八雲さんを見つけて、それまでは雫には少し乱暴なことをしなきゃいけないかもしれない。」

「いいんじゃない！一発くらい喝入れてやんな。」

「紅蘭をよろしくね。」

「任せといて。」

話の半分も理解できなかったが、自然と閉じかけていた扉の動きは止まっていた。

「落ち着いたとこっちが判断したら、動くからね。」

「うん。」

二人がそこまで話すと、紅蘭は仏蘭の指示で鴨熊も一緒に自分の部屋へと向かうために抱き上げ階段を上った。途中で振り返っても名取はあの微笑みを返してはくれず、黒い暗幕の奥をじっと見据えていた。

〜続く〜